

さん」といふ距てある三人稱に變へられてゐた。私に送るにこやかな眼付は、子供の笑顔に促された餘波であつた。私の意を迎へる時には、子供が私の前に差出され、彼女の眼は先づその子供の方を顧みてゐた。私達の生活は自由戀愛を貫き通した結果だつた。けに、かゝる變化が私には殊に鋭く感ぜられた。

然し私は、戀愛生活をいつまでも續けたいのではなかつた。戀愛は常住の性慾であると思つてゐた私は、子供を設けた後までも戀愛に耽るつもりではなかつた。けれども、私達の生活は何處までも愛の生活でなければならぬと、私は信じてゐた。そして、愛は常住の心の抱擁であると思つてゐた。もし彼女の心が私の心より外の物に向けられる時があるとするれば、私達の愛はそれだけ不完全になるわけだつた。所が彼女の心は、私の心から殆んど常に外らされて、子供の方をばかり向いてゐたではないか！ 而もそれは私達の子供である、私達の可愛い子供、また私にとつては、彼女の一部分たる子供！

私はこの氣持ちを、子供に對する嫉妬だと名付けていゝかどうかを知らない。然しそれより外に云ひやうはないやうな氣がする。秀子に對する憤りを、子供にまで蔽ひ被せねば止まない私の心は、如何に醜いもので毒されてゐたことであるか！ そして子供の唇を吸ひ、子供の頬をなめる私を、ちつと見てゐる秀子の皮肉な眼付の前に、私は幾度慄然としたことであらう！ それでも私はなほ、子供の可愛い唇や頬に慕ひ寄つていつた。すると秀子は荒々しく、私から子供を奪ひ取つてしまつた。私は頭を垂れて、秀子と子供との一體の前に、意氣地なく憐れみを乞ふた。然しやがてその憤懣が昂じると、私は一種の敵意を以て秀子につかつていつた。子供には當り散らした。秀子は私を頭から壓迫しやうとかいつた。醜い諍ひが初つた。そして結果は、私が秀子を殴り倒さうと、また子供を其處に放り出さうと、常に私の敗亡にきまつてゐた。なせなら、私は家庭内に於て自分の地位を失つてゐたから。

私は恐らく、子供が出来た新たな生活に進むに當つて、外の態度を用意して置かなければならなかつたのかも知れない。子供の出生は小事であつて、其後が大事であるといふことを、考へて置かなければならなかつたのかも知れない。

二階の書齋にちつとしてゐると、家の中はひつそりとしてゐる。みさ子は眠つてゐるのであらう。秀子は寢そべつてゐるのであらう。時々臺所の方でこゝろ音がするのは、はるが食事の用意をしてゐるものとみえる。ぼんやりしてゐると凡てが、生活が、自分自身が、佗びしく頼りなく思はれてくる。そして、そつと、足音を偷んで、憚るやうに二階から下りてゆく。秀子が針仕事をしてゐる。私は一寸喫驚する。向ふには、みさ子が眠つてゐる。私は其處に寄つてゆく。一寸指先で頬をつくと、眠りながら微笑む。「お止しなさい」と秀子が云ふ。私はなほ執拗になる。口を押しつけて頬や唇を吸ふ。子供は眼を覺す。しまひに泣き出す。私はもう嫌になる。「おい、お抱きよ」と秀子へ云ふ。「知るものですか、勝手に起

しといて」と彼女は答へる。私の方も意地になる。彼女の方も意地になる。子供はなほ泣き立てる。はるが臺所から出て来て、子供を抱く。私は不機嫌になる。いつまでも黙つてゐる。やがて秀子ははるに云ふ、「そつと寝かして、用をしておしまい。むづかつたらお父様が守りをして下さるさうだから。」私はそのあてつけに腹を立てる。子供は暫くおとなしく寝てゐる。やがてむづかり出す。遂には泣き出す。「子供を守りするのは女の役目だ」と私は秀子へ怒鳴りつける。「子供をいぢめるのは男の役目ですか」と彼女は反問する。口論が初まる。私ははるを呼んで、子供を抱けと云ひつける。「いゝから用を濟しておいで」と秀子は云ふ。はるは秀子の方に従ふ。子供は泣いたまゝ放つて置かれる。私は逃げ出すより外に仕方がない。「羽織を出してくれ、出かけるから」と秀子へ云ふ。「勝手にお出しなさるが、いゝわ」と彼女は答へる。私は箆筒の抽出から、むちやくちやに着物を引きずり出す。そして羽織だけを取り代へる。秀子は漸く立つて来て子供を抱く。そ

して着物を引き散らして私を冷然と見下す。私は赫となる。自分自身が醜く、彼女が憎くなる。彼女がもし子供を抱いてゐなければ、また殴りつけるかも知れないと自分自身を恐れる。私は出かけやうとする。「着物をどうするんです？」と彼女は私を追求する。「勝手に出せといふから出したんだ」と私は怒鳴り返す。冷やかな沈黙が落ちてくる。「今にも破裂しさうな反感が募ってくる。危い！ 私は外へ飛び出す。」

斯くて私の彷徨は初つたのである。私は不在なことが多くなつた。そして少くとも初めのうちは、「萬事がうまくいった。」

私はこんな風に考へた。私達が何かにつけて衝突し合ふのは、いつも鼻と鼻とをつき合してるからではないかしら。餘りに眼近くくつき過ぎてるからではないかしら。會社員みたいな生活が、神経の鋭敏な現代人には最も適してゐるのではないかしら。良人は朝から會社へ出かけて、必要な糧を稼いで、妻は家を守つ

て子供を育てゆく。夕方良人が家に歸ると、一日見なかつた妻の笑顔と子供の聲と、晩酌の食膳とが、綺麗に整つて待ち受けてゐる。食事が済むと、良人は晝間の疲れと食慾の満足とに、もはや眠ることだけをしか求めない。妻は子供を寝かしつけ、やがて自分も寝てしまふ。そして一日は終るのだ。二人の間には何等衝突すべき材料がない。良人は後顧の患ひなくして、自由に瘦腕を世に揮ふことが出来、妻は生計の煩ひなくして、自由に驢足を家庭内に伸すことが出来るのだ。……そして、良人は食を與へ、妻は肉體を供し、子供——彼等の惨めな後継者——が、年と共に殖ゑてゆく。

私は胸糞が悪くならざるを得なかつた。それほど私のうちには遊惰な心が蟠つてゐたのだ。民衆の中堅たる最も健全勤勉な人々を、右のやうに漫畫視して考へるほど、私のうちに頹廢的な氣分が濃くなつてゐたのだ。そしてこれは皆、家庭といふものから根こぎにされた結果であつた。

夜遅く家に歸る時、私は屋へ戻る罪人のやうな心地がした。家の中には、秀子の息吹きが、その重々しい蝟の木が 頑とし 根を張つてるやうに思はれた。私はおづくくと 寄せられてる玄關の戸を開き、それに自分で締りをした。家の者は皆ねてゐた。私は子供の眼を覺すま と拔足して、寢室へ忍び込み、冷たい蒲團の中にもぐり込んだ。秀子は大抵眠つてゐた。そしてごく稀には、薄目を開いて、而も底光りのする黒い眼で、私の方をちつと見た。彼女の口元には硬ばつた微笑が湛へられてゐた。そして、その眞白な齒並の奥から覗く糸切齒の金の光りは、私の心を魅してしまつた。私は官能の奴隷となつて、感覺の陶醉を彼女と自分とに與へた。而もそれは、平素の私と彼女との精神状態に對して、如何に不自然なものであつたか！ 翌朝になつて私達は、互に白けきつた氣持ちで、眼を外らすことが多かつた。斯くて私達はいつのまにか、眞の夫婦關係から、愛し合ふ男女關係からは尙更、遠ざかつていつた。

それも結局私には氣樂だつた。然し、自分の性慾を金の力によつて満すやうな機會を、而も自分の前に差出された機會をも、私は決して掴まなかつた。少くとも妻がある間は！ と私は自ら誓つてゐた。所が、それが却つて惡かつたのだ。何といふ不條理なことであらう！

私が外に出かけやうとすると、何處へ行くのかと秀子は尋ねだした。私が夜遅く歸つてくると、翌朝になつて、昨日は何處へ行つたのかと彼女は尋ねだした。私は氣にもかけなかつた。氣持ちの和らいでる時には、和らいでない時にも大低は、何處から何處へ行つたと明かに答へてやつた。少しく曖昧な點があると、彼女はなほ追求してきた。私は更に詳しく答へてやつた。餘りうるさくなると、かう答へた。

「でたらめに歩き廻つたことを、さう詳しく覚えてるものか。」  
彼女は口を噤んだ。

—理想の女—

不機嫌な時には、私はかう答へた。

「煩い。何處へ行かうと僕の勝手だ。」

「では私も勝手な真似をしますよ、その時になつて愚圖々々仰言らないやうになさい。」と彼女は答へ返した。

心が陰鬱に沈み込んで、氣分だけが妙に緊張してゐる時に、私は暫く黙つてた後かう答へた。

「放つといてくれ！ 僕は少し一人で考へたいんだ。」

すると彼女は、俄に顔を引締め、眼を横目勝ちに見据ゑて、室の片隅を睥んだ。いつまでもちつとしてゐた。私は少し變な氣がした。

「何を考へてるんだ。」と私は云つた。

「何でもよござんす。私にも考へがあります。」

彼女はやはり身動きもしなかつたが、やがてふいと立つて行つた。そして向ふ

の室で、女中の手からみさ子を抱き取ると、やけにゆすぶりながら室の中を歩き廻つてゐるのが、如何にも私への當てつけらしかつた。

私はさういふ彼女の様子が、どう考へても腑に落ちなかつた。何か新たな心理が彼女のうちに動いてゐることは分つたが、それが何であるかは分らなかつた。そして結局、彼女の心に芽したものが何であらうと、私の方が一步優勢になつたことだけは確かだつた。私はこの意外な結果に満足した。そして更に決定的な勝利を得んがために、殊更沈思を装ひ、出先を曖昧にしながら、一層頻繁に市内を彷徨し初めた。さういふ方法によつて、彼女の氣勢が折れ、家庭内に自分の權力をうち立て得たら、凡てがよくなるだらう、彼女と私との間もよくなるだらう、と私は考へてゐた。私は球突場へ通つた。碁や將碁を初めた。活動も見て歩いた。時には夜遅くまで酒を飲んだ。妓を呼ぶこともあつた。飽きると友人の家に寢轉んで、無駄話に耽つた。ちいさなハナをひいたり、ランプの空遊びをした。そし

て、遊惰といふものは妙なものである、初めはいつも陰鬱に曇つてゐた私の心が、非常に華かになつたり、非常に陰鬱になつたりした。浮々した氣持が何處までも私を運んでゆくかと思ふと、急に眞暗な穴の底へ陥つたやうな心地になつた。さういふどん底の氣分の時には、私はよく長谷川を訪問した。長谷川は近頃文壇に名を出した新進作家で、妹の道子も將來女流作家となる筈——本人の心では——であつた。家の中の空氣が、何處となく爽かでまた落付いてゐた。彼等二人の話を聞いてゐると、私の心へも清澄な光が射してきた。自分も勉強したいやうな氣が起つてきた。そしてすぐに家へ歸つた。然し、家の閾を跨ぐと、私の心はまた陰鬱になるのであつた。

或る日——その午後に私はまた秀子と喧嘩をした。初めは何でもないことだつたが、いつもとはだいたい調子が異つてゐた。みさ子が少し風邪の氣味だつた。熱を測ると七度一分あつた。「大丈夫でせうか、お醫者に診せないで、」と秀子は云つ

た。「七度二分までは發熱と云へないさうぢやないか、」と私は答へた。暫くすると、「大丈夫でせうか、」と秀子はまた云つた。「大丈夫だ、」と私は事もなげに答へた。さういふ問答の後に、私は椽側の障子を開け放つて、南を一杯受けた日向に寢轉んだ。彼女は私の不注意を責めた。私はうつかり一二言答へ返した。彼女はすぐにつゝ込んできた。「子供の風邪がひどくなつたら、あなたが責任を負つて下さるのね!」私は一寸あはてた。「でたらめなことを云ふな、」と投げやりの調子で答へた。彼女は私の顔をちつと見た。「あなたは、この頃ちつとも子供を可愛がりなさないのね、」と彼女は云つた。云はれてみると多少は當つてゐた。子供の側にくつついてることが、私には次第に少くなつてゐたのだ。私は話の方向を變へるために、別のことを云つた。「お前は、たゞ子供をだけ愛してる。それが本當の愛かも知れないよ。然し僕は……子供を愛する時は、お前をも愛してる時なんだ。」云ひ方が悪かつたので、彼女はすぐに結論して私に迫つた。「では、あなたはこの頃

私を愛しては下さらないのね。」彼女の云ふ所は、いつになく論理正しく鋭利だった。私はたち／＼となつた。癪だつた。「お前はどうかだ、」と反問してやつた。「私のことを云つてるのではありません、」と彼女は私を撃退した。「お前は子供だけ育てれば、それでいゝと思つてるんだらう、」と私は云つた。「あなたは私に子供だけ與へておけば、それでいゝと思つてゐらつしやるんでせう、」と彼女は云つた。議論は漫罵に變つていつた。私も彼女も、後に退かうとしなかつた。彼女は云つた、「あなたは子供を目の敵にしてるのね。」私は云つた、「お前は子供を武器にして僕に對抗してるんだ。」彼女は云つた、「あなたは私達と一緒に暮したくないんでせう！」私は云つた、「お前は僕を家から追ひ出したいんだらう！」しまひには口を噤むより外に仕方がなかつた。然し、いつもの喧嘩なら、互に殴り合はんばかりに激昂し熱してくるのだつたが、この時ばかりは、反感や憤りが内へ／＼と沈み込んで、二人の間の空氣は、氷のやうに冷たくなつた。表面だけが冷然と落付き

拂つて、心の底が暗い影に脅かされた。私達は長い間、石のやうに固くなつてちつと向ひ合つてゐた。——その或る日、私は外に出ないで、終日書齋にとち籠つてゐた。譯の分らない懸念が、私を家の中に引止めたのであつた。私はしきりに階下の物音が氣になつた。然し家の中は静かだつた。何事も起らなかつた。夕食は沈黙の間に終つた。私はまた二階に上つた。しひて書物を讀んだ。氣を落付けるために、長谷川へ手紙——取り留めもない感想——を書いた。そのうちに氣が散らなくなつた。私は凡てを忘れて、近着の外字小説を讀み初めた。

何時頃だつたか私は覺えてゐない。あたりはしんと静まり返つてゐた。夜遅く書物を讀んだり考へたりしてゐて、ふと我に返ると、何等の物音も聞えず、何の氣配もせず、時もその歩みを止めてるやうな静けさがあたりを支配し、宛も深い水底にでも陥つたやうな心地がし、凡ての物象が妙に冴え返つてくる瞬間が、よくあるものである。私はその晩、さういふ瞬間にあつた。そして、骸然と夢から

醒めたかのやうに、或は一舉に悪夢の中へ投げ込まれたかのやうに、強い衝動を受けて椅子から立上つた。向ふの襖がすーつと音もなく開いて、秀子が、石のやうに身を固くした秀子が、真直に私の方へ歩み寄つて來たのである。彼女は總毛立つた顔をしてゐた。眞蒼な頬に深い皺を刻んで——私が嘗て見たことのない生々しい陰惨な皺を刻んで、底光りのする眼が、影のない硝子のやうな眼が、露はに飛び出してゐた。朝顔の花が淡く絞り出された單衣の寢間着、細帯を腰に巻いたまゝのその姿は、下半身に受ける電燈の光りが弱々しいせいか、宛も幽靈のやうに思はれた。私は息をつめて、一瞬間無言のうちに彼女と向き合つてつゝ立つた。それから、最初の驚きをほつと一息吐き出すと、初めて現實に返つた。やはり秀子自身だつた。寢てゐたのを起き上つて、そつと私の室へ上つて來たのであつた。私はまた椅子に腰を下した。

「どうしたのだ、そんな姿をして。」と私は云つた。

秀子は私の卓子の横の方へ、他の椅子を引寄せて腰掛けた。暫く黙つてゐた。落付き拂つてゐた。そしてかう尋ねてきた。

「何を考へてゐらしたの。」

私はどう答へていゝか分らなかつた。彼女はまた云つた。

「私がいつて來ると喫驚なすつたわね。何を考へてゐらしたの。」

いやに眞剣なものを、私は彼女のうちに見て取つた。そして、つとめて平靜を保たうとした。

「だつて突然音も立てないではいつて來たんぢやないか。僕は初め幽靈かと思つた。喫驚するのは當り前さ。」

彼女は一寸鼻の先で、輕蔑的な笑ひ方をした。それからまた暫く黙つてゐた。

「何か用があるのかい。」と私は尋ねた。

「いゝえ、何をしてゐらつしやるのか一寸見に來たのよ。」



然しすぐその後で、彼女は急に顔を引緊めて、真正面から私に向つてきた。

「私は今晚こそ、本當のあなたの心をききたいんです。そしてきつぱりときままりをつけたいんです。」

「何のきままりをつけるんだ？」と私は平氣を装つた調子で答へた。

彼女は私の言葉には頓着なく、先へ云ひ進んだ。

「あなたは、私に隠してゐらつしやることがあるんでせう？」

私ももう眞劍にならざるを得なかつた。卓子の上に兩腕を組んで椅子に坐り直した。

「何を隠してると云ふんだ。何にもありはしない。」

「心の中で苦しんでゐらつしやることがあるんでせう。私にうち明けられないことが……。」

私には彼女が何を云つてるのか見當がつかなかつた。それで、自分の苦しんで

ゐることゝ云へば、彼女もよく知つてる通り、どうして彼女と喧嘩ばかりしてゐるか、どうしてかう反目し合ふやうになつたのか、そればかりだと云つた。これから先うまくゆかないものか、どうしたら昔のやうな状態になれるか、そればかり考へてるんだと云つた。自分の態度も悪い、然し彼女の態度にも悪い所がある、それをお互に矯正し合つてゆきたいものだ。

彼女は私の言葉を耳にも入れないかのやうに、書棚の方へ眼を外らしてゐたが、然し心では私の底意を窺つてゐたが、途中で俄に私の言葉を遮つた。

「いゝえ、そんなことではありません。」

「では何だい？ お前が眞劍に尋ねる以上、僕も眞劍に眞面目に、何でも本當のことを答へる。うち明けて云つてごらん。」

「私が云ひ出さなければ、どこまでも隠し通してみやうといふつもりなんでせう。でも私にはよく分つてゐます。いくらごまかさうつたつて、ごまかせるものです。」

か。」

「だから何のことだか云つてごらんと云つてるぢやないか。自分から押しかけてきといて……。」

「圖々しいと仰言るんですか。あなたの方がよつぽど圖々しいぢやありませんか。」

そして、私達の會話はぐるぐると同じ所を廻るだけで、いつまでも中心に觸れてゆかなかつた。このまゝでは例の喧嘩に終るの外はないと私は思つた。そして一擧にきり込んでいつた。

「お前は、僕がお前を愛さなくなつたとしても云ふのか。」

「さあ、どうですか。」と彼女は空嘯いた調子で答へながら、口元に皮肉な皺を寄せた。

先刻からの焦燥の念が俄に反感に燃え立つてくるのを私は覺えた。

「愛さなければどうするといふんだ！」と私は怒鳴りつけてやつた。

「私がどうしようもあなたには關係ありません。」と彼女は答へた。「勝手にその女と一緒にになりなさがいゝわ。」

私は呆氣にとられた。茫然と彼女を見つめると、彼女は私の視線の下にちつと唇をかみしめてゐたが、俄に肩を震はして私の方へ向き直つた。

「私はいつまでも厄介者にされてゐたくありません。出て行くと仰言るならいつでも出て行きます。云はれなくつたつて私の方から出て行きます。」

私は黙つてゐた。

「その女と結婚なさるがいゝわ。けれど私にだつて意地があります。どんなことにならうと、その時になつて文句を仰言らないやうに、斷つておきますよ。」

私は自分の心が靜に落付いてるのを感じた。笑へもしなければ、別に驚かれもしなかつた。そして冷かに云つた。

—理想の女—

「お前は、僕が誰かに戀してるとでも思つてるのか。」  
彼女は答へなかつた。

「僕ははつきり云つておく、僕には他に戀人なんかありはしない。……然し、お前は一體誰のことを云つてるんだ？」

「あなたは、まだごまかさうとなさるんですか。御自分の心に尋ねてみなさるが、いゝわ。」と彼女は答へた。

穿鑿的な一種の興味が私のうちに湧いてきた。自分に覺えがないだけに、いやに頭が落付いてゐた。そして私は、知つてる女性の名前を一々擧げて尋ねた。彼女はそのどれにも、肯否の答へをしなかつた。然し私が、「では夢の女なんだらう」と嘲り氣味の言葉を發すると、彼女は俄にいきり立つた。そして「私に戀人があること」を、遠廻しに立證していつた。私が始終出歩いてばかりゐること、家に居ても様子に落付きがないこと、然し遊蕩を初めたのではないこと、なせなら、

酒氣を帯びて歸ることも稀であるし、一晩も外泊して來たことがないから、そしてまた、女は子供を育てるのみが務めではないとよく云つてること、いやに何かを考へ込んでばかり居ること、出かける時の慌しい様子のこと、みさ子に對して冷淡な素振りが多くなつたこと、だから、「誰かに戀し初めてるに違ひない」といふ結論に達するのであつた。

私は云つた。

「ではお前は、僕とお前との愛について僕がどんなに苦しんでるか、それを少しも知らないのか。」

彼女は答へた。

「苦しんでは長谷川さんなんかの所へばかり行らつしやるんでせう。」

私はつと身を起した。長谷川の妹のことを、道子のことを、彼女は考へてゐたのだ。

「お前は道子さんのことを考へてゐるんだね！」と私は叫んだ。

「いゝえ、道子さんとは限りません。」

「馬鹿なことを云ふな！」私はそれを押つ被せて云つた。そして、長谷川の家へ屢々行くのは、いつもいゝ意味の氣分を與へられるからであること、道子さんに對しては嘗て愛を感じたこともなし、これからも愛を感じる恐れは決してないこと、第一文學なんかをやらうといふ女と戀をすることは、自分のやうな寧ろ家庭的な男には適しないこと、自分が長く苦しんでゐるのも、自分のうちに家庭的な氣分が濃いからだといふこと、そんなことを考へると道子さんにどんな迷惑を及ぼすか分らないこと、などを私は急ぎ込んで説き立てた。

「どうだか、今に分ることですわ。」と彼女は答へた。

私達は口を噤んだ。問題の中心にぶつかると、其處から先へは進めないで、未解決のまま止るの外はなかつた。さうだ、「今に分ること」だつたのだ。私はちつ

としてゐた。彼女も私の卓子の横につかまりながら、身動きもしなかつた。寢間着のまま素足で、眉根に皺を寄せ口をきつと結んで、眼を見据ゑてゐた。このままいつまでもちつとしてゐたら、どんなことになるか分らない、と私は思つた。夜が深く静まり返つて、氷のやうな沈黙が落ちて來た。

「もうお寢み！」と私は云つた。

彼女は答へなかつた。

私は椅子から立ち上つて、室の中を歩きだした。「お寢みよ！」と私はまた云つた。彼女は黙つてゐた。私は歩き續けた。彼女の耳の後ろに垂れたほつれ毛が、堅くなつて震えてるのが見えた。「お寢みつたら！」と私は三度云つた。「あなたお寢みなすつたらいゝでせう、」と彼女は答へ返した。私はなほ室の中を歩き續けた。それからまた椅子に坐つた。自分の心がまた彼女の心が、最も悪い状態に在るのを私は感じた。私はちつと彼女の姿を見つめてやつた。反感が、殆んど完全と云

つてもいゝほどの敵意が、私の身内を震はした。その時私が飛び上つて彼女を殴りつけなかつたのは、彼女が寝間着一枚の素足のまゝで石のやうに固くなつてゐるからであつた。

「勝手にするがいゝ！」

さう私は云ひすて、階下へ下りて行つた。みさ子はすやく／＼眠つてゐた。私は堪らなくなつて、着物のまゝ蒲團の中へもぐり込んで、夜着を頭から被つた。頭が熱くなつてゐて、足先がぞく／＼冷たかつた。傍の蒲團の中に寝てゐる秀子の姿を見出したのは、翌日眼を覺してからだつた。

そして、私達は朝から口を利き出だした。然しそれは、如何に冷かな用件のみの言葉だつたらう！ 二人の間に深い溝が堀られたことを、私は感じた。激しい喧嘩の末、私達は二三日も言葉を交へないことがあつたが、それでもさういふ反目は、お互に一つの根で繋つてるといふ意識から来る苛ら立ちで、繋りながら争つ

てるといふ苛ら立ちで、助長せられたものであつた。所が今や、二人を結びつける根が断たれたやうな冷かさが、互に別個のものになつたといふやうな無關心さが、二人の間に挟まつてきたのである。濡ひのない言葉——感情の籠らない言葉を、互に時々交しながら、或る破滅を期待する恐れで、心を固く鎖してゐた。

それが私には堪へ難かつた。家庭内に於ける彼女の壓迫から来る息苦しさは、前方に破滅を豫期する息苦しさに変つていつた。而も彼女の誤解——あの場面シーンの中心問題——に再び觸れることは、益々お互の心を遠ざけるものゝやうに感ぜられた。『どうにでもなるやうになれ！』さう私は半ば悲壯に半ば捨鉢シヤクハチに考へては、やはり外へ飛び出すのであつた。私の心の底に、彼女と別れてもさう惜しくはないといふ氣持が流れてゐるのを、私はまだ氣付いてゐなかつた。家に歸つて來ると或る不安な恐れが私を囚へた。然し彼女は家の中に澄し込んでゐた。道子の

ことをも再び云ひ出さなかつた。

私の足は長谷川の家から次第に遠のいていつた。人から疑はれることによつて却つて心が唆られる例は、よくあるものだけれど、私にはさういふ暗示は更に働かなかつた。餘りに馬鹿々々しい氣がした。問題は道子一人に在るのではないやうな氣がした。さうだ、道子もその中の一人ではあつたが、問題は道子一人に在るのではなかつた。それでは誰に？……自ら尋ねてみて私は駭然としたのである。

市内を彷徨してゐるうちに、私の眼は行き逢ふあらゆる女に向けられてゐた。而もさういふ私の眼は、單なる路傍の人を見る眼とは違つてゐた。あらゆる異性の方へしたひ寄る青春期の眼、慌しい而も執拗な、恥かしげな而も厚かましい、内氣らしい而も露骨な、自分と相手とをすぐに眞赤ならしむるやうな熱つぽい眼、それと同じものだつたのだ。私は自ら知らないで、眼の前を通り過ぎるあらゆる

女の、髪の匂ひ、眼の輝き、唇の色、頸筋の皮膚、胸の脹らみ、腰の曲線、足の指先、などを臆面もなく而もひそかに窺つてゐた。その上、異性をよく知つてる私の眼は、青春期の童貞の夢幻的な眼よりも、相手の各局部を評價するのに鋭利だつた。それだけにまた、私の眼には享樂的實感が濃く裏付けられてゐた。

問題は誰に在るかを自ら尋ねてみた時、私は初めて右の事實に氣付いたのだつた。秀子の嫉妬は、或る意味に於て至當だつたのである。私はあらゆる女性に、心を——戀愛的な心を寄せてゐたのだ。あらゆる女性を對象として、現實的氣分で塗られた戀愛を空想してゐたのだ。私の愛情は一人の女を離れて、少くとも心持の上だけでは、あらゆる女の上に分散させられてゐた。危険と云へば、凡ての女が危険だつた。長谷川道子も、友人の細君も、電車に乗り合した令嬢も、劇場の廊下で行き合ふ夫人も、カフェーの女給仕も、年若くて或る種の容姿を具へてゐる以上は、皆危険だつた。

—理想の女—

省みてこのことに氣付いた時、私の驚きは如何ばかりだつたらう！ それは殆んど狼狽にも近かつた。私は自分を取り失つたやうな氣がした。妻に集中すべき愛情が一般女性の上に散り失せるといふことは、良人として最も悪い状態に違ひない。而も、妻を殴りつけ市内を彷徨してゐながらも、遊裡に夜を明かさないとをひそかに矜りとしてゐた私だつたのだ。

私は恥しかつた。自分の心を制しやうとした。然しさういふ努力の結果はなほいけなかつた。私の遊蕩的な眼は、なほ頻繁にあらゆる女性の上に向けられ、また一方秀子の上にも向けられた。私は秀子を、家庭内に於ける敵だと思做したのみでなく、また自分の若々しい生命を束縛する軛だと思做し初めた。私のうちに在る遊蕩的な悪魔は、あらゆる女性を享樂するの機會を得ないことに、不満を感じはしなかつたが、あらゆる女性を享樂出来ない身分に置かれてゐるのを、憾みとした。

私は冷かな評價的な眼で、秀子を——妻といふ名前で自分を束縛してゐる秀子を、初め眺めたのである。初めて逢つた女でももあるかのやうに眺めたしたのである。そして見出したものは、彼女の醜い點ばかりであつた。馴れきつた眼には、彼女の長所は映らないで、短所ばかりが映つてきた。

彼女の眼の縁には、薄暗い隈が出来てゐた。わりに細いけれども時々非常に魅力ある輝きを見せる彼女の眼は、その下眼瞼の隈のために、殆んど睫毛の柔かな影を失つて、極めて露骨な陰險な光りを帯びるやうになつてゐた。——眉の間までつきぬけてゐるいゝ恰好の鼻は、その先端に意外にも、小さな瘤を一つ拵へて、其處の皮膚にはざら／＼した毛穴が開いてゐた。そして鼻筋の上、眉の間に、時々ヒステリックな皺が寄つた。——眞白な綺麗な齒並を覗かせる口は、角が引緊つてゐるために一寸は目立たないけれど、よく見ると不相應に大きかつた。その上、上齒と下齒とががち合つて先端で平らに合さつてゐるために、下唇が少しつき出て

—理想の女—

残忍な相を作り、それに壓迫されて上唇が萎縮してゐた。——それらを包むふつくらとした頬は、肉が落ちたために深い皺を皮下に刻んで、笑ふ時や緊張した時に、その皺が表面に現はれて来て顔全體を卑しくした。——頸から肩から上膊へなだれ落ちてゐる線は、しなやかで繊細だつたが、その先を辿つてみると、腰と腿との間に急な曲線を拵へて、そのまゝ足先へかけてすぼんでしまひ、全體の立像に不安定な危さがあつた。——指甲の面積に比較すると手指がわりに長いのに、指先がつぶれたやうに太くて、爪は縦の長さよりも横幅の方が大きかつた。そのため、元來は美しかるべき手全體が屋守（やまもり）の手のやうな感じを興へた。——さういふ彼女は、殆んど一時間置き位には必ず、時には極めて頻繁に、鼻の兩側に大きな皺を寄せて顔を歪めながら、簪か櫛かを髪の間差込んで頭を搔いた。——甘えた調子の時には、上半身をうね／＼と揺らしながら、宛もお手玉でもするやうな調子で左手で袂を弄んだ。屹となつた時には、身體を固く保ちながら、兩手

を一緒に持ち寄つて無意識的に指輪をいぢくつた。——食事の前には必ず兩手で襟をきつと合した。食事がすむと、一寸小首を傾げて、それからお茶を飲んだ。お茶を飲む間に、大抵は香の物を一切れ食つた。——寝る時には、寝間着に着代へた後一寸座る癖があつた。朝は、眼が覺めても長く床の中にはいつてゐた。愈々起き上ると、少しの休みもなく而も氣長に身仕舞をした。

私はそれらのことを、一種の皮肉な眼で發見していつた。すると彼女は、何の氣もつかないらしく、例の絲切齒の金の光りで私の眼をくらまさうとした。然し私には、その魅力が別の意味で感じられてきた。その絲切齒こそ、彼女の我儘な利己的な一轍な残忍さを迎合的な小俐口さで蔽つた性質、そのまゝの象徴だつた。私はかういふことを覺えてゐる。——近所に金棒（きんぼう）引きの奥さんが居て、種々の噂を方々へ流布して廻つてゐた。その奥さんが、秀子のことを、生意氣で我儘で仇つぼくて而も田舎者らしく、何でも地方のお茶屋か宿屋かさういふ家の娘に違



ひないと、噂をしてるといふことが、何處からともなく秀子の耳に傳はつた。秀子は眞赤になつて怒り立て、いつかどつちめてやると云ひ張つた。私は彼女の怒り方が餘り激しいので、揶揄ひ氣味に、「さういふ風な所もお前のうちに在るよ、」と云つてみた。それがなほいけなかつた。彼女は益々怒つた。それで私は、あの奥さんの單なる噂に心から苛ら立つのは、自分を向ふと同等の地位に引下げることで、教養ある者の取る態度ではないといふことを、諄々と説いてやつた。然し彼女には、私の云ふ意味がよく分らないらしかつた。いつまでも腹を立てゝゐた。その奥さんと途中で逢つても、挨拶もしなかつた。所が一ヶ月ばかり過ぎた後に、奥さんと愉快げに談笑してゐる彼女を、私は見出した。「一寸喫驚した。」と、どうして仲直りをしたんだい、と尋ねてやつた。すると彼女は答へた。「仲直りなんかするものですか。でも可哀想だから、調子を合してやつてゐるんですわ。」そして彼女は影で、その奥さんのことを輕蔑的に惡口し續けた。私には彼女の心理がよく

分らなかつた。なせなら、私が説いてきかした教養ある者の取る態度と、彼女の態度は結果に於て多少類似はしてゐたけれど、心の動き方は全く反對らしかつたからである。——前年の年末に、秀子は、遠縁に當る家へと世話になつた家へと一つの進物を整へた。一つは、二羽の鳩が古い汚い果物籠の中に押込んであり、一つは、二羽の鴨が進物用の綺麗な籠の中に並べられてゐた。後者に就ては私も文句はなかつたが、前者に就ては少からず驚かされた。そして彼女にそのことを責めた。「これで澤山ですわ、」と彼女は答へた。私は説き立てた、普通の場合なら兎に角、年末の進物として他家へ贈るのにそんな不體裁なことは止したが、一層鳩だけにするか、または他方のご同様の立派な進物籠に入れるか、何れかでなければ先方の感情を害すると。然し彼女は平氣だつた。あの家へならどんな體裁でも構はないと答へた。「それではお前の氣持が濟むまい、」と私は尋ねた。「何とも思ひませんわ、」と彼女は答へた。それで私は、相手の如何によつて自分の態度を

二三にするのは最も下等なことだと、詳しく説き立てた。すると彼女は、態度は相手によつてきめるべきであつて、一つの態度で世の中を渡れるものではないと、反對に主張しだした。そして、彼女は私の言には頑として應せず、汚い籠のまゝ鳩を贈つてしまつた。——相手の如何によつて態度をきめるといふのが、彼女の信条であるならば、私は何も云ふべきことがない。私が彼女を愛しないならば、恐らく彼女も私を愛しないだらう。愛は心の態度である。實際彼女は、私の心の如何によつて自分の心の態度をきめやうとしてゐるではないか。心の自然の推移によつて、彼女が私を愛しもしくは愛しないのならば、それを私は聊かも憾みとはしない。然し愛を取引視せられることは堪らない。私が理想とする女性は——私に理想の女性があるとすればそれは……。

あゝその時になつて、秀子と結婚して二年後になつて、私のうちに「理想の女」が眼覺めてきたのである。そして私は初めて、この理想の女に秀子を比較してみた。何といふ違ひであつたらう。精神的にも肉體的にも、殆んど比較にならないほどの差があつた。然し理想の女の本體は、まだ捉へ難い空漠たるもので、少しも具體的のまとまりを有しなかつた。たゞ、それを秀子と比較してみると、秀子の有する肉體的・精神的の醜い點が、一々はつきり浮き出してきたのである。そして、さういふ醜い點を一つも具へてゐないといふだけの空漠たる姿で、理想の女が私の前につゝ立つたのである。

私はかゝる架空的な理想の女を標準として、秀子に嚴密なる批判の眼を向けた。そして私の考へは過去にまで溯つて、どうして秀子を自分は選んだのであるかといふ問ひに到達した。私はそれに答へることが出来なかつた。秀子との會面、其後の熱烈な戀愛、父母や親戚の人々の非難と反對、それを斷乎として卻けつゝ拂つた犠牲、遂に自由戀愛を貫き通した結婚、それまでの経過を回想してみると、私は其處に何等必然的なものをも認めなかつた。凡てが偶然のうちに運ばれたも

の、やうに考へられた。それならば、周囲の障害をあれほど力強く突破してきた私の意志は、一體何であつたのか、何處から出て來たのであつたか？ それは單に青春の空想と悲壯な感激性とのみだつた。それは凡て私のうちに在つたもので、秀子と私との間の必然ではなかつたのだ。秀子でなくともよかつたのだ。他の如何なる女性でもよかつたのだ。そしてたとひかういふ考へは時の距りと現在の心の状態とに欺かれてるものであるとしても、今眼前に居る秀子は、果して私が一生の伴侶として満足し得らるゝ女性であるか？ 否。それでは、私は一生を不満のうちに終るか、または妻といふものに對するあらゆる要求を捨て去るか、二途の外はないのである。……秀子と別れる？ 私はその考へを押し進めることが出來なかつた。恐ろしかつた、餘りに恐ろしかつた。そして私の前には、たゞ選擇を誤つたといふ事實のみが残された。

選擇を誤つたのならば、何處かに本當の選擇が残されてる筈だつた。私は秀子と

別れるといふ考へをはつきり意識せず、結果を豫想せず、残された選擇を探し廻つた。街路を彷徨する私の眼は、更に執拗になつていつた、あゝ。理想の女を探し求める、それほど馬鹿げたことがあるだらうか！ 理想は常に理想として止まるものだ、それは單に吾々に方向を指示するだけで、到達せらるゝ距離に在るものではない。然し私はそんなことをはつきり考へなかつた。運命づけられた「自分の半分」の存在を、現在に、現實に、信じてゐたのである。失望は當然だつた。私は如何なる女にも理想の女を見出さなかつた。そして更に悪いことには、秀子よりもよりよく理想の女に近い者を、多くの女に見出したのである。

昏迷しきつた氣持ちで夜遅く歸つて來ると、秀子は子供に添寝しながら、鎖骨のどび出た胸をはだけたまゝ眠つてゐた。もしくは眠つたふりをしてゐた。朝眼を覺すと、彼女は自分の布團に戻つてゐたが、額には四五筋の髪の毛が、ねつとりとこびりついてることがあつた。夜中に夢にでも魔まされたのだらう。その髪も

産後の抜毛に薄くなつて、生え際が妙に透いて見えた。起き上つて髪を束ねるのに、長く時間を費した。表皮だけが白く底艶のない顔をしながら、鋭い光りの眼で冷かに私に對した。そして殆んど熱狂的に、終日子供の世話ばかりやいてゐた。晩になるとよく居眠りをした。冷たい沈黙が家の中を支配した。そして同じやうな日々が、今に何か起りそうな危い瀬戸際をする／＼と滑るやうに、而も事もなく、明けてはまた暮れた。私は殆んど書物も讀まず仕事もしなかつた。二階の書齋に寢轉んだり、外へ出かけたりした。

さういふうちに、私はふと千代子の夢をみるやうになつた。——千代子といふのは、私の叔父の一人娘で、私は幼い時からよく知つてゐた。始終往き來をしてゐた。そのうちに、私が大學に進み彼女が女學校の上級になると、隙が少いのと何だか憚られるので、いくらか疎遠がちになつた。けれども互の心は兩方から歩み寄つてゐた。彼女は四年級の時から卒業まで引續いて、然し慰み半分に、舊派

とも新派ともつかぬ和歌を學んでゐた。時々私へ自作の添削を頼んできた。私の方が彼女よりずつとまづかつた。私が筆を入れた歌は餘り先生から譽められなかつた。それでも、私も彼女も満足してゐた。友情とも愛情ともつかない心が、次第にごく靜かに深まつていつた。その時、私と秀子との暴風のやうな戀愛がはじまつた。それは凡てを吹き拂つてしまつた。所が間もなく、千代子は十八の秋に、肋膜と横隔膜とを同時に病んで、短い臥床の後に死んでしまつた。私は彼女の位牌の前で、しめやかな涙を流した。それには秀子との戀愛の感激から來る涙も交つてゐた。私は秀子に彼女のことを話した。「あなたはその方を愛してゐられたのでせう」と秀子は尋ねた。「愛してゐたやうな氣がする、然し戀してはゐなかつた」と私は答へた。其後私達は二人で、千代子の墓參をしたことがあつた。——その千代子のことを、私はふと夢みるやうになつた。何故だか私は知らない。恐らくは、理想の女を求めあぐんでゐた私の心は、記憶の隅々までを漁つて、氣まぐれ

に彼女の色褪せた姿を捉へてきたのであらう。なせなら、やがて理想の女と彼女の幻とは、私の頭の中で一つになつてしまつたから。

私は屢々その夢をみた。何れも、何等の場面も事件もない、断片的なものばかりだつた。彼女と遊んでる所（何の遊びだか分らなかつた）、話をしてる所（何の話だか分らなかつた）、黙つて向ひ合つてる所（何處でだか分らなかつた）、彼女が一人で佇んでる所、さういふ極めて瞬間的なものばかりだつた。然し夢からさめた後で、何だか妙な氣がした。他の凡てのことがぼやけて、彼女のみが馬鹿にはつきり残つてゐた。勿論その顔立や姿などはぼんやりして分らなかつたが、「彼女だ」といふことだけで明瞭に頭へ刻み込まれた。その上、夢の後で變に不安な胸騒ぎがした。どうも不思議だつたので、つい秀子へ口を滑らすこともあつた。「さうを」と秀子は簡單に答へた。私も大して氣にはしなかつた。

所が、度重なるに従つて、私は氣になりだした。千代子の夢をみた後で、彼女

に對して、しみじみとした、やるせないやうな、胸が苦しくなるやうな、變挺な氣持ちを覺えた。しまひには、夢をみないのにみたど、眼を覺す瞬間に感ずるやうになつた。そして、私は一種の愛着を彼女に對して懐くやうになつた。その愛着の情が次第に募つてくると、いつのまにか「理想の女」と「彼女」とが一體をなして、私の心を惹きつけてしまつた。私は夜早く寝るやうになつた。外へ出かけても早く歸つて来るやうになつた。夜中に何度も眼を覺した。それは何とも云へない蠱惑的な樂しみだつた。私はその怪しい瞬間的な愉悅に、自らつとめて耽らうとまでした。そしてなほ私が心を惑はしたことには、秀子までが彼女の夢をみたのだつた。

或る朝、秀子は私に云つた。

「今朝がた、千代子さんの夢を見ましたわ。」

私は驚いて彼女の顔を見つめた。そして口早に尋ねた。

—理想の女—

「え、どんな夢？ 何をしてた所だ？ そして、初めてなのか、また何度もこの頃みるのか？」

私はへまだつたんだ。秀子は私の様子を見て、何かに憎えたやうに肩を縮め、暫くちつと私の眼の中を覗き込んだ後に、漸く答へた。

「覚えておません。」

「覚えてゐないことがあるものか。どんな夢だつたんだ？」と私はたゞみかけて尋ねた。

彼女の様子は俄に變つた。彼女は嘲笑的に答へた。

「あなたは、まるで戀敵こひたきみたいな調子ね。」

私は何か大きなものにはね飛されたやうな氣がした。云ひ知れぬ憤りで頭が熱くなつた。手の届く周囲を見廻した。敷島の一袋が眼にはいつた。それを取るといきなり、彼女へ投げつけた。煙草は彼女の所まで届かないで、途中で落ちて散ら

ばつた。

「馬鹿ツ！ 恥を知るがいゝ！」

さう云ひすてゝ私は二階へ上つた。

然し、書齋の中でほつと我に返ると、私は顔が眞赤になつた。私こそ恥を知るがいゝのだ。私はちつとして居れないで、室の中を歩き出した。椽側に出てみた。卓子の前の椅子に腰を下した。窓から外を覗いてみた。そして漸く氣分が和らいだ。然し、取り返しをつかないことをしたといふ惨めさが、深く私の心の底に残つた。

嫌な——嫌忌すべき日が續いた。絶えず嘲笑的な眼で秀子から窺はれてることを私は感じた。その眼は私の夢の中までも覗かうとしてゐた。私は數日前に、千代子の夢を見たと思つて眼覺めた時、自分が遺精してゐることを知つた。その時はさほど氣にしなかつたが、今になつて思ひ出すと、穴にでも入りたい氣がした。

—理想の女—

それでも私は、秀子の執拗な眼から隠れて、やはり千代子の夢をみ続けた。夢をみて夜中にふと眼を覺すと、先づ秀子の方を顧みた。さういふ懸念のために、私の清らかな千代子の幻はどんなに毒されたことであらう。私は秀子を本當に憎む氣になつた。然し千代子はもう故人なのだ！ 私はどうすることも出来ない淵へ陥つてゆく自分を見出した。戀人に別れる悲痛さはまだ堪へられる。亡き人に戀し初めたといふ悶えは、どうすることも出来なかつた。

或る夜、私はまた千代子の夢から覺めた。隣りの床に寝てる秀子の方を窺ふと、彼女は眠つてゐた。私は仰向に眞直に寢返つて、天井を仰いだ。絹覆ひをした電燈の光りが、室の中に薄ぼんやりと湛へてゐた。夢のやうな静けさだつた。私は天井に眼をやりながら、消え去つた幻の跡を追つてゐた。長い時間がたつた。と何かに私はぞつとした。あたりをそつと氣を配ると、秀子はぱつちり眼を開いて私の方を見つめてゐた。私は息をつめた。ちつとしてゐた。暫くすると低い落付

いた聲が聞えた。

「あなたは、千代子さんの夢をごらんすつたんでせう。」

私は黙つてゐた。

また囁くやうな聲が聞えた。

「私もみました。」

暫く沈黙が続いた。

私は秀子の方へ顔を向けた。彼女は大きく眼を見開いて、なほ私の方を見つめてゐた。口をきつと結んで、頭をがつくりと枕にのせ、瞳を据ゑてゐた。その顔全體が灰白い蒼さで浮き出してゐた。まるで死人の顔だ。私は冷たい戰慄が背中に流れるのを覺えた。すると、彼女もそれを感じてか、急に布團をはねのけて、上半身を起した。そして私の方へ向き直ると、憎えたやうな調子で叫び出した。「私はもう嫌です、あなたと一つ室に寝るのは。二階に寝て下さい。氣味が悪く

つて嫌です。」

私は惘然として、急には言葉が出なかつた。暫くして尋ねだした。

「何が氣味が悪いんだ？」

彼女は黙つてゐた。

「千代子さんの夢をみるのが氣味悪いのか。」

彼女は身動きもしなかつた。

「僕が千代子さんの夢をみるのが氣味悪いのか。」

彼女はやはり身動きもしなかつた。

「何が一體氣味悪いんだ？」

彼女はちつととしてゐた。

私は急に氣が苛ら立つてきた。そんなことを自分が仕出かすか分らないと思つた。ちり／＼と時間が迫つてゆくやうな心地だつた。私は叫び出した。

「云はないのか、何が氣味悪いんだ？ 黙つてると僕はそんなことをするか分らない。そんなことになるか分らないんだ。云つてごらん！」

彼女は冷たい沒感情的な聲で云つた。

「あなたの様子が氣味悪いんです。」

「僕の様子が？……………」

私は續けて何か云つてやらうと思つたが、言葉が見付からなかつた。ちり／＼してきた。然し、私はその時、自分がやはり仰向に寝たまゝなのを氣付いた。仰向にちつと寝たまゝで叫んでる自分の姿が、私の心にはつきり映じた。そのことが、苛ら立つた感情を引き締め澄み切らして、其處に喰ひ止めてしまつた。私は意識が中斷されたやうな透徹した心地になつた。彼女は半身を起したまゝちつとしてゐた。

私達は黙つてゐた。長い間だつた。私は落付いた調子で云つた。



「僕の様子が氣味悪いんだつて？ お前は嘘を云つてるね。……然しそれならそれにして置かう。もう尋ねない。だがお前は自分の様子がどんなに氣味悪いか、自分で知らないだらう。」

彼女は何とも答へなかつた。それでもやがて、靜にまた横になつて布團を被つた。私もそれきり口を噤んだ。だいたい暫くたつてから、彼女がすゝり泣いてるのを私は氣付いた。然し黙つてゐた。今更どうにも仕方がないと思つた。

翌朝私は、悪夢に魘された後のやうな氣分で床を離れた。自暴自棄の感情が動いてゐた。一方には軽くはしやいでる感情もあつた。滑稽なおどけた感情もあつた。そしてそれらを、白日夢の惑はしい氣分が包んでゐた。私は自分自身がよく分らなかつた。秀子は私に一言も口を利かなかつた。私は無關心だつた。書齋にぼんやりしてゐると、壁に掛つてる父の肖像が眼についた。生きてるやうにありありと父の姿が浮んできた。……私ははつと卓子を一つ叩いた。さうだ、千代子

の寫眞に逢つて來やう！ それから先はどうとでも、なるやうになるがいゝ！ 出かける時に、私は秀子へ何か一言云つてやりたかつたが、言葉が見つからないうちに、私の身體はもう玄關を出てゐた。私は眞直に叔父の家へ向つた。

それは、戀人に逢ひに行くやうな氣持ちでもなければ、戀人の寫眞を見に行くやうな氣持でもなく、何だか神秘なものを覗きに行くやうな感じで、而も捨鉢な氣持ちだつた。私は途中から電車を捨て、辻傳に乗り、幌をすつかり下さした。

叔父と叔母とは、僅かな財産を一生のうちにゆつくり食ひつぶす覺悟で、たゞ隙つぶしに漢學の僅かな弟子を取るだけで、小さな借家に関散な日を送つてゐた。私が訪れると、丁度二人共在宅だつた。

私は随分長く姿を見せなかつたことを詫びた。然し二人はそんな疎遠不疎遠なごに頓着するやうな人ではなかつた。私が顔を上げると、いきなり叔父はかう云つた。

「やあ随分痩せたやうぢやないか。どうしたんだい。顔の色も悪い。」

私は種々なことを尋ねられさうなのを恐れて、すぐにかう切り出してみた。

「實は急な用で上つたんです。千代ちゃんの写真を一寸見せて下さいませんか。」

私は自分でも少し聲の震えるのを感じたが、叔父は氣付かないらしかった。

「千代子の写真、妙な物に用があるんだね。死んだ者は仕方がないぢやないか。」

……おい出しておやりな。」

私は叔母の方へ云つた。

「よく似た人が居るもんですから……。なるべく新らしいのが見たいんです。一枚だけで澤山です。」

叔母は手文庫の中から、最近の——死ぬ半年前の写真を取り出してくれた。私はそれを手に取つて、眼をつぶつたまゝ膝の上で披き、そして眼を開いてみた。

あゝその時私は、どんなに驚き、次には冷たくなり、次にぼんやりしてしまつ

たことだらう。千代子の顔は、「彼女」——否「理想の女」とは、殆んど似もつかぬものであつた。半身を少し斜にした姿が、肱掛椅子に掛け、手には扇を持つてゐた。その顔をよく見てゐると、なるほど見覚えのある親しい點が一つ／＼出て來た。それは千代子に違ひなかつた。斜め左から兩方へ分けられた髪が、伶俐な廣い額を半ば隠してゐた。眉尻が心持ち下り、眼尻が心持ち上つてゐた。はつきりうち開いた眼の中に、艶やかな瞳が上目がちに置かれてゐた。下唇が殆んど目につかない位に歪んで、軽く上齒に噛まれてるやうな心持を與へてゐた。額から細り加減に落ちてゐる双頬の線が、奥齒のあたりで一吋膨らんで仇氣なさを作り、細い三角形の願に終つてゐた。さういふ真中に、小鼻のよく目立つ細い鼻が通つてゐた。……私はそれらに皆見覚えがあつた。そして其處に、親しい千代子の姿があり／＼と浮んできた。然しそれは、私の幻とは全く異つてゐた。どう異つてゐるかを私は指摘することが出来なかつた。全體の氣持ちが全く異つてゐた

—理想の女—

のである。そして私の彼女は、理想の女は、再び空漠たる所へ消へ失せてしまつた。私の手には、ありし日の千代子の實際の姿だけが残つた。

「どうしたんだい、大變ぼんやりしてるぢやないか。」

さういふ叔父の言葉に、私は初めて我に返つた。そして何を云つてるのか自分でもよく分らない言葉を、叔父と叔母とに交したまゝ、私は急いで辭し去つてしまつた。

凡ては惑はしだつたのだ。然し私は、この幻滅に對してどう身を處していいか分らなかつた。千代子は消え失せたけれども、「理想の女」は殘存してゐた。そして、それは一の焦點を失つたがために、一の像イマージュでなくなつて影となつたがために、私の前後左右至る處につき立つてるやうな氣がした。街路の曲り角、並木の下、電柱の横、奥まつた扉口、凡そ人が身を寄せ得る處なら如何なる處にでも、ちつと佇んでるやうな氣がした。而も私が實際眼をやると、其處には誰も居なかつた。

理想の女に似もつかぬ幾多の女性が、あちらこちらに往き來してゐた。……然し、私にとつては、彼女等は凡て假象に過ぎなかつたのだ。私にとつて眞に現實なのは、眼に見えない「理想の女」のみだつた。眼には見えないが、何處かに、すぐ近くに、立つてゐるやうな氣がした。

なるべく影の多い奥まつた所を、誰か——彼女が、立つてゐさうな所を、私は覗き込みながら歩き續けた。

「うゝゝゝ、」と何かと唸るやうな聲がした。私は喫驚して立ち止つた。私は或る神社の境内にはいつて、ぼんやり歩いてるのであつた。聲に驚いて眼を擧げると、紺緋を着た十六七の男が赤坊カキヤを負つて、私の前に立つてゐた。彼はまた「うゝゝゝ」と唸りながら、私の手を指し示した。見ると私の手には、火のついた紙巻煙草があつた。これだなと私は思つた。そして、袂から煙草を一本取り出して若者に與へた。彼はそれを黙つて受取つたが、また「うゝゝゝ」と唸つた。私はその

顔を見つめた。彼はきよとんとした眼付で、私の手の煙草を見つめながら、變に先の曲った指で、煙草の火を指し示した。私は煙草の火を差出さうとしたが、思ひ直して、マッチをすつてやつた。若者は煙草に火を吸ひつけると、その煙をすーつと吸ひ込みながら、「うー」と長く引いた音を喉から出した。私が黙つてゐると、彼はまた「うー」と云つた。私は嫌な氣がしてふいと立ち去つた。後ろから、「うー」といふ唸り聲が追つかけてきた。私は足を早めた。

暫く行つてふり返ると、もう其處には誰も居なかつた。

然しその盲目的な唸り聲が、いつのまにか私の心の中にはいり込んでゐた。私は「うー」と唸つてみて、自分でも喫驚した。そしてその後で、妙にぼかんとしてしまつた。何かに憑かれてるやうな自分を見出した。街路をやたらに歩き廻りながら、「うー、うー」と心で唸つてみた。何だか可笑しかつた。と同時にまた、自分の顔が今にも泣き出しさうに歪められてるのを、私は意識してゐた。どうに

もならなかつた。ごん底まではいり込まなければ承知出来ないやうな氣がした。私は或る料理屋へ上つて、酒を飲んだ。無理に酔つ拂はうとした。女中の口先に乗つてうつかり菊代を名指してしまつた。菊代といふのは、私が市内を彷徨してるうちに、いつしか顔馴染になつた妓おんなで、一二度機會があつたにも拘らず、私は深入りするのを避けてゐたのだ——秀子のために。

菊代が來ると、私は妙に苛立つてきた。やたらに彼女へ杯をさしつけた。重苦しいへまな冗談口を盛んに利いた。しまひにはその三味線を奪ひ取つて、變な手附で「一つとや」を弾き出した。自分自身が滑稽だつた。滑稽を通り越して泣きたかつた。「松飾りーい、松飾り、」の所へ來て手を忘れた。つかへてしまつた。私はびんと三本の絃いぢを引き切つてしまつた。

「まあ！ 何をなさるのよ。」と彼女はつめ寄つてきた。

眼險の薄い小賢しい眼が、妙に動ずんだ光りを帯びて、緊りのない脹れつばい

顔付に、一寸敵意らしい險が漂つてゐた。私はその顔を見つめた。

「僕は今晚は歸らないよ。」と私は吐き出すやうにして云つた。

彼女は一寸瞬きをした。次の瞬間には妙に荒々しい素振りになつてゐた。

「卑怯な方ね！」と彼女は云つた。「歸らうたつて、もう歸すものですか。」

彼女は酔つてゐた。私も酔つてゐた。それから私達は、別の奥まつた家の狭い室で、時間過ぎの酒を飲み初めた。自分自身の魂を踏み躪りたいやうな、また妙に冷たい敵意ある意識が、ちらと起りかけるのを、私はむりやりに酔ひつぶしてしまつた。酔ひつぶれると、たゞ空虚な渦巻きの世界のみだつた。

翌朝遅く、爛れた舌を鍋の鳥で刺戟しながら朝食を済すと、私は菊代に碌々挨拶の言葉もかけないで、慌しく其處を飛び出した。空が晴れてゐた。明るい日の光りの下で、自分自身が堪らなく惨めに思へた。凡てが穢らはしく呪はしかつた。そのくせ意識がぼんやり曇つてゐた。何か忘れたものがあるやうだつたが、それ

がどうしても思ひ出せなかつた。

私は他人の家へでもはいるやうな氣持ちで、ぼんやり自家の門をくゞつた。

所が、其處に出て來た秀子の顔を見ると、私のうちにむら／＼と反抗の氣分が湧いた。彼女はお歸りなさいとも云はないうちに、冷然と、それでも眼を伏せ唇をかみながら、真先にかう云つた。

「男の意地つて下らないものね。」

私が叔父の家へ泊つたことゝ彼女は思つてるのだ、さう私は推察した。そして云つてやつた。

「何が下らないんだ？……叔父の家へなんか泊るものか。」

「さうでせうとも。」と彼女は答へた。「どうせ、穢ならしい狭苦しい家なんでせうよ。」

彼女は顔の筋肉一つ動かさなかつた。私は彼女から極端な蔑視を受けてること

を感じた。然し咄差に言葉が出なかつた。そして一寸間が途切れると、もう何も云ふべきことが無かつた。私達は黙り込んでしまつた。

私は頭と身體とが困憊しきつてゐた。二階に上つて、椅子にかけたまゝうと／＼しながら、凡てを忘れてしまはうとした。頭が茫として力が無かつた。譯の分らない象<sup>すがた</sup>が入り亂れて、白日夢を見てるやうな氣がした。……と、私ははつと我に返つた。椽側に、障子の向ふに、誰かゞしよんぼり佇んでゐた。それがはつきり見えてきた。「彼女」だ！ と私は心に叫んだ。すると、その姿は煙のやうに消えてしまつた。私は心亂れながら、椽側に出てみた。明るい日の光りが、大氣のうち一面に漲つてゐた。私はその眞晝の明るみの中に、取り失つた姿を探し求めた。菊代のこと頭が映じてきた。そして昨夜のことが……それは、噫、「彼女」を心に描きながら行つた自瀆行爲に過ぎなかつた。私は庭の方へ、かつと唾をした。その後で、堪らなく淋しく悲しくなつた。

私は不快と寂寥との餘り、晝食も取らなかつた。錢湯に行つてみると、蒼い血管の浮いて見える自分の肉體が、慘めで汚く思はれてきて、すぐに飛び出してしまつた。外を歩く氣にもなれなかつた。家におつとしてゐる氣にもなれなかつた。「彼女」が何處かに、至る所に、立つてるやうに思へて、しきりに氣にかゝつた。

そして夕方、座敷の隅に眠つてるみさ子を見出した時、私は泣きたいやうな心地になつた。私はその側に惹きつけられた。みさ子は、片手を肩にかついた恰好に布團から出して、すやく／＼眠つてゐた。私の氣配を感じてか、夢をみてか、それとも無心にか、乳を吸ふ形に唇を動かした。その小さな濡つた唇に、私は自分の唇を持つていつた。それから俄に身を引いて後ろを顧みた。誰も居なかつた。ああ私は誰に氣兼ねをしたのであつたか！ 私はまた自分の口を、子供の柔かな頬へ持つていつた。それから額へ唇をあてた。香りのある温い子供の肉體と心とが私の唇に感せられた。我知らず涙が出て來た。布團から出てゐる手をそつと入れて

やらうとすると、みさ子は眼を覺した。私はそれを胸に抱き上げてやつた。なほむづかるので、立ち上つて歩いてやらうとした。一足歩き出すと、室の入口に秀子が立つて、ちつと私の方を眺めてゐた。私は眼を外らした。秀子は歩み寄つてきた。私達は無言のうちに、子供を受け渡しした。その後で私は、自分が如何に卑屈であるかを感じた。私は兩の拳を握りしめて、秀子の方を睥みつけてやつた。彼女は其處に坐つて、子供に乳を含ました。ごくろ／＼と乳を吸つてる子供の上に、彼女は庇ふやうに頬を押し當てゐた。私は握りしめた拳をそのままに、自分の書齋へ逃げていつた。

二階にちつとしてゐると、階下で子供の泣く聲が聞えてきた。それを賺して秀子の聲もかすかに聞えてきた。乳の出が悪くなつたのを、一人は泣き一人は困つてるのだ。私は堪らない氣がした。

その晩から私は一人二階に寝た。私は凡てを失つてしまつたのだ、秀子をもみ

さ子をも家庭をも愛をも。私の手に残つたものは何もなかつた。然し私に残つてるものは唯一つあつた。それは「彼女」——「理想の女」であつた。永久に具體的な形を取ることのない女性だつた。私はそれに囚へられてしまつた。そして、あらゆる持続的な男女關係が恐ろしくなつた。一人の女を守る時、私は必ずやその女を「理想の女」に照して眺めるに相違ない。然るに凡ての女は、たとひ戀した女でも、私にとつては「理想の女」の假象に過ぎない。假象はやがて本物のために消滅させられる運命に在るのだ。而もその假象によつて得た子供だけが、假象の女の手の中に、私自身の血を享けて現實に残るのだ。私は恐ろしくなつた。

私は間違つてゐたのだらうか？　どの點が間違つてゐたのだらうか？……私  
私の心は何處にも安住出來ずに、永久に彷徨し續けるの外はなかつた——徒らに「理想の女」を追ひ求めながら。

理想の女終



理想の女

大正十年十月十七日印刷  
大正十年十月廿三日發行

定價二圓五十錢

著者所有權

著者 豐島與志雄

發行者 松野鶴平

印刷者 川崎佐吉

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地  
發兌元 隆文館株式會社

電話一七八〇番二四〇番二四一番  
電話一七八〇番二四〇番二四一番

(川崎活版所印行)



田代 倫氏著

四六判最美麗  
三五〇頁函入

定價壹圓八拾錢

送料  
拾貳錢

# 闇の使者

傑作  
好評

- 1. 闇の使者
- 2. 窓にて
- 3. れむり
- 4. 不知の客
- 5. 幸福は空腹に近し
- 6. 灯火
- 7. 翌日
- 8. たそがれ
- 9. 黒衣の子
- 10. 白と黒
- 11. 復讐美談
- 12. 死者の書

壹幕乃至五幕の新脚本集で、毎編著者の高級な劇的天分が横溢し、新進氣鋭の作風を示してゐる。その「闇の使者」を初とし、巧に男女の戀愛を描き、その生活關係を叙し、著者独自の批判を加へて、讀者を思潮の深みと新しきと潤ひとに導く傑作集である。

文壇の黎明期に新人の處女作を提供す

## 新しきアダムとイヴ 田代倫著

一九二二年五月刊行 四六判・四百九拾頁・上製美本

愛の卷  
戀の二部  
のより成  
れる最  
長篇の  
告白小  
説!

深刻なる創造慾を享有する男女が熱烈なる戀愛の共鳴感に導かれて共に藝術の完成に専心するといふ自己表現の慘めさと彼等が周圍の因襲的生活に反逆者たるの外なき懊惱とに基いた自叙體の小説で其描寫の大膽無遠慮極る點に於て既に月並作家の流を抜いてゐる人生の苦味酸味の中に滴る如き甘味と芳醇の氣分を湛へた此新進作家苦心十年の名作として普く江湖に推奨する

相馬泰三氏著

# 鹿子木夫人

四六判・四〇〇頁  
絹装・函入美本  
一九二一年・五月刊行

定價

金貳圓四拾錢

送料拾貳錢

## 内容

13	11	9	7	5	3	1
Y	胸の痛み	BI軒事件	處女	二夫婦	釣葱と仔描	鹿子木夫人
14	12	10	8	6	4	2
幼年の思ひ出	野の哄笑	芳賀とその友	さよ子	喜代子	たはむれ	自信

新し、現代的な女性を題材として慈  
愛、妙平、明と、而して、暗題を稀なる  
で、描き、華かな、都、會、生、活、に、在、す、る  
悲、痛、を、記、録、し、た、の、可、憐、な、情、感、を、深、い  
其、後、の、半、に、語、を、添、へ、た、最、も、自、信、あ、る  
創、作、集、で、あ、る

終